

調査報告

2011年夏期 宮城県・岩手県・秋田県での男女共学、ジェンダー平等教育 調査概要

橋本 紀子

はじめに

3月11日の東北大震災と福島第一原発の事故によって、3月中に予定されていた宮城、岩手調査は中止となり、東北新幹線復旧後の6月と8月に、新たに秋田調査も加えて実施することになった。以下、宮城、岩手、秋田調査の日程、目的、結果の概要を報告する。

宮城県調査報告

調査日程

2011年6月22日

宮城県石巻商業高等学校訪問

- ・女川避難所
- ・石巻日和山公園周辺地域での懇談

2011年6月23日

宮城県仙台二華高等学校(男女共学・併設型中高一貫教育)訪問

「県立高校共学教育の充実を求める会」
との懇談

今回は、東北大震災の被災地へ救援物資を届けることや、ジェンダー視点から復興への問題や課題を整理するということを主目的とするメンバーと一部共同しながらの調査となった。ここでは、男女共学問題に関してのみの報告とする。

1) 宮城県石巻商業高等学校訪問

2011年6月22日 12時頃～午後2時頃。
上総通教頭先生、養護教諭、家庭科担当教諭(非)の対応。

1911年創立の石巻商業高等学校は、100年の歴史と伝統を持つ学校で戦後も男子校として存続してきた。男女共学に移行したのは、2006年からで初年度女子入学者は86名であったが、平成23年4月18日現在は、3学年女子合計248名、男子335名、総計583名の学校となる。女子が4割以上を占め、実質的な男女共学校である。

進路も大学、専門学校などに進学する者が男女とも多く、22年度はそれぞれ、26%と23%を占める。つまり、男女合計すると全体の半数近くが進学していることになる。

就職は地元石巻でと言うのが最も多く、22.4%である。共学移行しても、校歌は変更していないが、制服は男子に合わせて、女子の制服も新しく作ったし、トイレも設置した。部活などが多様化し、活性化している側面がある。

この地域では、石巻市立女子商業と市立女子高校を統合するという計画があるが、統合しても女子校にする予定であることが明らかになった。

資料収集:

『平成22年度 学校要覧』宮城県石巻商業高等学校

『2012年学校案内 羽ばたけ未来に向かって』宮城県石巻商業高等学校

平成22年度 進路状況の表など2枚

2) 宮城県仙台二華高等学校(男女共学・併設型中高一貫教育)訪問

2011年6月23日 午前9時半～11時半頃。

鈴木信也校長、教頭先生の対応。

当日、9時45分から授業参観の予定で行ったが、例年と違い、始業式が遅れたため、中間テスト期間中になっていた。そのため、授業参観はできず、校長先生のお話を伺うことと、校舎の視察をすることになった。女子校から共学校へ移行して2年目。7階建てのエレベーター使用の中央吹き抜けの校舎、学年ごとに中間色の色分けがしてある。

沿革：

明治 37 年 私立東華女学校設立許可

大正 7 年 宮城県第二高等女学校開校

大正 10 年 私立東華高等女学校を県に移管し、その校舎に宮城県第二高等女学校が移転、私立東華高等女学校を廃校にし、その職員、生徒は第二高女に引き継がれる。(同窓会は合併、二華会前身)

昭和 23 年 宮城県第二女子高等学校発

平成 23 年 宮城県仙台二華高等学校に校名変更
(男女共学・併設型中高一貫教育校である宮城県仙台二華中学校・仙台二華高等学校となる)

鈴木：宮城県の高校では女子校、男子校では元来、校地面積に違いがあって、女子校だったところは、校庭が狭い。そのため、男子の運動系の部活動は十分行えないので、第二グラウンドを確保した。しかし、ここから歩いて20分ぐらいのところにあるので、あまり、うまく活用はできていない。校庭は中学校と共同使用。高校は6

クラスで1クラス40人である。定員240人。今年は男子が13人しか入学しなかったため、1クラスだけ共学クラスにした(女子27、男子13)。昨年は15人だったので、2クラス共学クラスである。

中学校も選抜試験を受けて入ってくるが、倍率は10倍ぐらい。2クラスで大体男女半々で入学している。2010年は男子35名、女子45名、2011年は男子42名、女子38名であった。この生徒たちが高校に進むころには、男女比がかなり、改善されるのではないかと思う。

橋本：この学校の前身、宮城第二女子高校と宮城第一女子高校にはどんな違いがあったか。

鈴木：二女は良妻賢母型で地元志向の生徒が多いが、一女は自由闊達で進取の気風に富んでいるという校風の違いがあった。

それで、一女の方には割合、男子は入学しやすいが、こういうところに男子が入ってくるのは難しいと思う。共学になってからは、世界をみつめ羽ばたいてほしいということで、インターナショナルスタディ(IS地球環境について外国人と話し合える力を育てる)にも力をいれ、東北大学の留学生から話を聞いたり、大使館からも人を招いて講演をしてもらったりしている。このほかに、サイエンティフィックリサーチ(SR)やキャリアスタディ(CS)、シンキングメソッド(TM)などをキーワードにして、教育に取り組んでいる。

橋本：仙台にあるナンバースクールの共学は、各学校いろいろな経過と特徴をもって進められてきたと思うが、

その辺についてどのように見ているか。

鈴木：昭和 45 年頃に制服自由化運動があったが、仙台一高、二高、三高と宮城一女は自由服にした。でも、二女と三女は制服を続けてきた。他校が自由化しても制服を守ったというような伝統を重んじる愛校精神が PTA や同窓会にもある。平成 13 年に県立高校の共学化がはじまったが、各校の校風や伝統が共学化の中身にも関係しているかもしれない。一高はバンカラ風、二高はお坊ちゃん風で、進学実績を伸ばしてきた。仙台二高の方が昭和 50 年代に成績がトップになった。それは、仙台の学区が南学区と北学区に分かれていて、一高と二女が南学区、二高と一女が北学区なのだが、北学区のほうが新興住宅地で教育熱心な家庭が多いからと思われる。

昨年、交通事情がよくなり学区はいらないということで、撤廃したが、学区の撤廃運動をしたのは一高です。こういう、事情があって、二女高もどういう学校かという特色作りをする必要があった。それで、PTA や同窓会も一致して男女共学の中高一貫校という選択をする事にした。

ただ、福島の共学にはお金がかけられているが、(女子校の移転による校地の拡張などがなされた)宮城県は財政難でその半分ぐらいしか予算をとっていない。

橋本：宮城県下の男女共学移行には統廃合問題がありましたね。

校歌の「やまとおみな」を共学になっても変えていないが、どうしてか。

鈴木：それは、歌詞を見ていただければわ

かるが、次のことばへの掛り言葉だから、修飾語なんだからいいのではないかということで、そのままになっている。

橋本：どんなタイプの男子が入学してきているか。

鈴木：入学した男子は「男子校」には行きたくない、行けない生徒のようで、優しい感じの男子生徒が入学してきている。姉や母、祖母が、二女の出身で勧められたからというのもある。1 年目は高校に 15 人入学してきたので、7 人と 8 人にわけて、2 クラス共学クラスにしたがクラスにいづらそうで、休み時間などに 7 階の特別教室に集まっていた。2 年目に 13 人ではということで、1 クラスにしたが、クラスに溶け込み、昼休みでも教室に落ち着いている。女生徒の多くは「男子は特にいらない」といっているが、受け入れてはいる。部活は、テニス部、ソフト部に多くの男子が入ったが、女子と一緒に練習している。高校の体育も一緒に行っている。ただ、男子のスピードが違うので、種目によっては男女別に練習している。中学生は 1 グループ 26~27 人で構成して、3 グループで体育をしているが、種目によっては男女別にしている。

生徒会活動も中高一貫の生徒会があって、活動しているが、高校の男子生徒が一人入り、抵抗なくやっている。また、中学校にも独自の生徒会ができた。

高月：家庭科は何単位やっているか。

鈴木：女子生徒が多いが、家庭科は 2 単位、新カリから進学校として 2 単位にした。

この後、学内を視察したが施設設備はかなり充実していた。家庭科室は7階で3.11震災のときの地震の揺れが大きく、被服室の卓上にあったミシンが40台ほど壊れたり、調理室の食器が壊れたりしたということだった。

3)「県立高校共学教育の充実を求める会」 との懇談

2011年度県立高校共学教育の充実を求める会 総会 午後1時～3時

総会は午後2時頃までで、その後、1時間ほど懇談。

最初に簡単に双方の自己紹介の後、資料に基づき、橋本「男女共学制度下でどのようなジェンダー平等教育が行われてきたか」永井「関東3県男女共学推進ネットワーク設立報告」について述べて、意見交換を行った。

校歌については、天野さんから宮城県古河高校は元の校歌の一番と三番をうたわないようにしたという例と、塩釜高校と白石高校はそれぞれ女子高校と統合して新しい校歌を作ったという例が上げられた。

永井先生から栃木県の烏丸高校は共学になってからダンス部に男子が一人入ってきたことや、今は生徒会長が女子だという点が報告された。西原先生は二華高校の元家庭科教師だったが、現役の頃は家庭科で家族と社会に関わる問題を男女平等の視点からも教えようとしていたという点、校歌について校長はそのような説明をしていたか、こじつけのようだというような発言があった。

時間がなくて、十分な討議はできなかつ

たが、前代表の高橋さんから、男女共学は統廃合の問題を抜きにしては語れないと言う点や、共学反対論者には、男女平等、人権尊重、男女共学による人間形成上の利点などの教育論的な話は全く、通じなかったなどの点が、語られた。

ここでもらった資料では「平成23年度宮城県立新設共学校・学年在籍生徒数 女子比率」資料が役立つ。

当日は配布しなかったが、この懇談用に作成した、現在もある全国の男子校、女子校と最近共学に移行した高校名及び移行年などの一覧(資料)を参考にここに、掲載する。

岩手県調査報告

調査前の準備メモと訪問結果の概要

1) 2011/8/14 橋本調査メモ

1. 岩手県立盛岡第二高等学校年史資料室訪問

日時：2011年8月17日 午後1時半～3時半

訪問の目的：戦後直後に3校統合で成立した盛岡高校の分離過程で起きた盛岡第二高校残留男子の問題と、その後、女子高に戻っていく経緯等について。

横澤氏から送られてきた資料で明らかにされている点と質問

(1) 学制変遷、(2) 盛岡二高男子生徒数

* 昭和24年4月から盛岡第一高校、盛岡第二高校、盛岡商業高校を統合して、総合制、男女共学制の盛岡高校を創立、しかし、生徒は入学先の校舎で学び、全生徒が会したのは運動会だけだった。

* 昭和25年度盛岡高校上田校舎、商

平成23年度 宮城県立新設共学校一学年在籍生徒数 女子比率 (23年度合格者)

	平成23年度				平成22年度				平成21年度		平成20年度		平成19年度		平成18年度		平成17年度							
	合計	男子	女子	割合	合計	男子	女子	割合	合計	男子	女子	割合	合計	男子	女子	割合	合計	男子	女子	割合				
白石高校	280	116	164	58.6%	280	137	143	51.1%	283	138	144	50.9%	278	143	135	48.6%	280	129	151	53.9%	280	127	153	54.6%
塩釜高校	400	173	227	56.8%	401	140	261	65.1%																
仙台一高	321	219	102	31.8%	323	241	82	25.4%																
仙台二華	240	13	227	94.6%	240	15	225	93.8%																
仙台三桜	280	25	255	91.1%	281	33	248	88.3%																
仙台第三	321	223	79	24.6%	320	238	82	25.6%	324	229	95	29.3%												
宮城第一	281	43	238	84.7%	281	39	242	86.1%	283	33	250	88.3%	282	25	257	91.1%								
仙台第二	320	210	110	34.4%	318	219	99	31.1%	322	225	97	30.1%	320	224	96	30.0%	325	254	71	21.8%				
石巻高校	241	124	117	48.5%	240	139	101	42.1%	240	140	100	41.7%	234	141	93	39.7%	240	146	94	39.2%	240	138	102	42.5%
石好文館	198	74	124	62.6%	200	53	147	73.5%	200	55	145	72.5%	198	43	155	78.3%	200	30	170	85.0%	195	37	158	81.0%
石巻商業	200	108	92	46.0%	200	117	83	41.5%	200	119	81	40.5%	200	138	62	31.0%	205	112	93	45.4%	202	116	86	42.6%
角田高校	187	105	82	43.9%	190	89	101	53.2%	189	79	90	53.3%	192	76	116	60.4%	200	108	92	46.0%	233	102	131	56.2%
古川高校	240	126	114	47.5%	240	150	90	37.5%	241	146	95	39.4%	239	123	116	48.5%	241	142	99	41.1%	240	142	98	40.8%
古川黎明	242	62	180	74.4%	172	35	137	79.7%	241	60	181	75.1%	229	59	170	74.2%	241	57	184	76.3%	240	60	180	75.0%
築館高校	192	107	85	44.3%	178	85	93	52.2%	190	81	99	55.0%	190	102	88	46.3%	235	130	105	44.7%	216	114	102	47.2%
気仙沼高	276	142	134	48.6%	280	148	132	47.1%	283	138	144	50.9%	278	143	135	48.6%	280	129	151	53.9%	280	129	151	53.9%

資料

公立高等学校における近年共学移行した高校および現在も別学の高校一覧				2011.6.21		
男子高	2007年版		2011年	女子高	2007年版	2011年
岩手				岩手	盛岡第二	共学校だが'62年より実質女子高
宮城県	仙台第一	10年～ 共学		宮城県	第一女子	08年～ 共学 宮城第一高
	仙台第二	07年～ 共学			第二女子	10年～ 中高一貫共学 仙台二華高
	仙台第三	09年～ 共学			第三女子	10年～ 共学 仙台三桜高
	市立仙台商業	09年～ 私立女子商と統合(新校舎)			市立仙台女子	09年～ 私立仙台商と統合
	塩釜	10年～ 塩釜女子と統合(西キャンパスに)			石巻市立女子商業	石巻女子と統合の方向で調整中
	白石	10年～ 白石女子と統合(新校舎)			石巻市立女子	石巻女子商と統合の方向で調整中
					塩釜女子	10年～ 塩釜高と統合(東キャンパスに)
					白石女子	10年～ 白石高と統合
					矢本	07年 閉校
				秋田	秋田北	08年～ 共学
					能代北	13年に能代高と統合予定
					横手城南	08年～ 共学
					大館桂	
					湯沢北	11年～ 湯沢商工と統合 湯沢翔北高
					由利	07年 共学
					角館南	
山形	山形南	共学校だが実質男子高		山形	山形西	共学校だが実質女子高
					鶴岡北	共学校だが実質女子高
茨城	大宮工業	08年 閉校		茨城	水戸第二	共学校だが実質女子高(S40～50年代は男子在籍)
					日立第二	共学校だが実質女子高
栃木	宇都宮			栃木	宇都宮女子	
	宇都宮東	10年～ 中高一貫共学			宇都宮中央女子	
	足利				足利女子	
	栃木				足利西	07年 足利商と統合 足利清風商業
	佐野	11年～ 中高一貫共学			栃木女子	
	真岡				佐野女子	11年～ 共学 佐野東高(1年生のみ、2・3年生は佐野女子)
	大田原				真岡女子	
	烏山	08年 烏山女子と統合			大田原女子	
					烏山女子	08年 烏山高と統合 10年閉校
群馬	前橋			群馬	前橋女子	
	高崎				前橋東商業	07年 前橋商と統合 09年 閉校
	伊勢崎東	05年 境高と統合 伊勢崎高			高崎女子	
	太田				桐生女子	
	沼田				境	05年 伊勢崎東高と統合 伊勢崎高
	館林				大田女子	
	渋川				大田西女子	07年 閉校
	藤岡	07年 藤岡女子と統合 藤岡中央高			沼田女子	
	富岡				館林女子	
					渋川女子	
					藤岡女子	07年 藤岡高と統合 藤岡中央高
					富岡東	
					吾妻	
埼玉	浦和			埼玉	浦和第一女子	
	川越				常盤	03年～ 共学
	熊谷				川越女子	
	春日部				熊谷市立女子	08年 閉校
	松山				熊谷女子	
					春日部女子	
					松山女子	
					鴻巣女子	
					久喜	
				千葉	千葉女子	
					銚子	07年～ 共学
					安房南	08年 安房高と統合
					木更津東	
					勝浦若潮 御宿	05年 勝浦高と統合
東京	筑波大付属駒場			東京	お茶の水女子大付属	
				神奈川	藤沢	10年 大清水高と統合 藤沢清流高
				長野	長野市立皇月	08年 共学 市立長野高に改称
				愛知	豊田東	07年 共学
				奈良	北和女子	05年 田原本農業と統合 磯城野高
				和歌山	海南市立海南市	07年 下津女子と統合 海南下津商高
					海南市立下津女子	07年 海南市高と統合 海南下津商高
				高知	高知丸の内	05年～ 共学
徳島	阿南工業	共学校だが実質男子高				
				島根	島根市立松江女子	
				福岡	福岡市立福岡女子	
					組合立三井中央	
					那珂川町立福岡女子商業	
				熊本	第一	共学校だが'67年より実質女子高
				大分	大分西	03年～ 共学
鹿児島	鹿児島市立鹿児島商業			鹿児島	鹿児島市立鹿児島女子	
					鹿屋市立鹿屋女子	
					野田女子	

業部に女子を、白梅校舎に男子を入れた。このときに白梅校舎に入ったのは、横澤一男、藤村三郎、高橋恒夫など盛岡第二高等学校二回卒生たちである。白梅校舎で共学となった1年生男子たちは、盛岡高校生として入学したつもりであった。

- * 昭和26年4月に分離。
分離となり、白梅校舎に配属となっていた男子たちは、上田校舎への移動、すなわち、盛岡第一高校への移動を校長に、また、男子生徒の親も含めて、教育委員会に申し出たが、受け入れられなかった。最終的に4人しか受け入れられないという回答が来て、しかも、生徒同士でその4人を選び出すというような過酷なことをさせていた。この段階の教育委員会は公選制のはずだし、生徒の利益、要求をどのように考えていたのかが問われる。

「こどもの権利条約」3条の子どもの最善の利益を尊重するという立場からは考えられない事態である。藤村三郎氏の『盛岡高等学校の統合と分離について』では、この経緯を丁寧に解明し、この顛末を、占領政策や戦後教育改革の問題という視点からではなく、教育行政の責任者や担当者の功名心などから分析している。

- * 昭和28年3月に卒業：
釈然としないまま、2年生、3年生のときは、盛岡第二高校生として白梅校舎で学び、人によって違いはあるが、その後の人生にもかなりの影響を受ける。
とりわけ、理不尽なやりかたで、少年の心が傷つけられたことに対する、

公的な謝罪はおろか、岩手県教育史にさえ、その経過についての正確な記述がないことが、当事者にとっては大きな問題となっている。

(3) 白梅会報第23号 座談会「男子同窓生大いに語る」

昭和26年に入学した男子生徒(3回生)は、盛岡第二高校として入学してきたのであって、この場合は2回生とは受け止め方に違いが出るのではないか。この最初に共学になった男子生徒の配属校舎の決め方が、希望校舎を入学願書に書くようになっていたという、理由だということだが、これも、何を意味するのかの説明もなかったということであるから、とにかく、共学の実をあげるということで、このような詐欺的なことをしたのだとすれば、生徒の人権侵害になる事例と考えられる。

質問：ただ、その翌年も同じぐらいの63名の入学者があったということをどのように、考えたらよいのか、伺いたいと思う。・・・座談会にそのヒントはあるように思われたが。

- * 女子高校に戻っていった後も、これら男子を同窓会の一員として扱ってきた対応については、評価しうる。
CF：山口県豊浦高校の場合

質問：当時の地域住民や保護者の共学化に関する意見はどのようなものであったか？

質問：教員や生徒自身は共学に移行することについて、どのように考えていたのか。

質問：当時の同窓会誌や新聞等に関連する記事があれば収集したい。

(4) 座談会「新制高校誕生」『岩手の教育行政物語』六三制教育研究会

質問：当時の岩手県教育界の状況について思うことがありますか。

史料(4)にヒントがあると思いますが、思うところをお聞かせください。

参考：横手(美入野)高校に昭和26年に初めて入学した22名(花の50期生)の女性の回顧録に、(新制)横手第二中学校の担任教師に毎日のように横手高校に受験するように説得されて、学校側に頼まれて10数人が進学したとある。他の生徒も各中学の進路指導や担任に説得されて受けたということがあげられている。

長野県立松本深志高校の場合とは違うと思った。東北地方で共学を実施するのは容易ではなかったと思われる。

宮城県では、戦後直後宮城県立宮城第三女子高等学校が男子生徒を1学年10数人ずつ2学年入学させたが、共学化ができないとなって、それぞれ、希望する仙台一高、二高に移動させているという例からみると、宇野学務課長などの教育行政に地元の人になっていたかなども関係してくると思う。教育の自治と地方分権とも言うべき問題がある。

2) 訪問結果の概要

当日の参加者は横澤先生(盛岡第二高等学校2回生)の他に、8回生の千葉昌慶さん(東京電気大学卒)が、参加してくれた。詳細はテーブル起こしの方に譲り、要点のみを記す。

* 上田校舎と白梅(“はくばい”)校舎にどうやってわけたか。・・・真相はわからないとのこと。可能性については、そこで藤村さんのも引用して論議となる。そのなかで、注目すべき点があきらかになった。

* 当時の新制中学校の進路指導が重要な役割を果たしていた。

横澤：3つとも(盛岡高校、盛岡女子高校、盛岡商業の校舎?)同じだと言われた。どっちでも、同じだと言われたのに、先生の移動はあまりなかった(ので、配属された生徒は行った先の教員の質に影響を受ける)。進学時に希望は聞かれなかった。白梅に来たのは、私立の岩手中学からと、岩手大学附属中学からが多い。付属は実験校的な性格があるから、仕方がないかなと思っていた面もある。

* 3校分離について

横澤先生を含め4人で、校長に談判に行く。ここで、親も行ったかも知れない。男子の親に集まってもらった。親たちも、盛岡第一高校への移動を求めて、教育委員会に交渉に行っている。横澤先生たちは、新しい校長と担任にここに残るように説得された。「おまえたちが、中心になって新しい二高の歴史を作ろう!」と。

しかし、その後、新しい二高を作るような財政的な積極的な動きはしていない。

黒沢尻南校(平成3年から共学)とか、花巻南校のように、後からでもいいから共学にならないか、男子の後輩が入ってきたらいいなというのが夢だ。

3回生はA、Bが女子クラス、C、D、Eが混合クラスだった。

4、5回生は、A、B、Cが女子クラス、

D、E が混合クラスだった。

6、7、8、9、10 回生は、A、B、C、D が女子クラス、E が混合クラスだった。

千葉：中学校の進路指導で、同じクラスから3名受けた。父親が中学の教師で説得して男女共学の実質化をはかるためにということで、受けさせた。私のは入学者が19名で少なくなったので、教育委員会がもう、先細りだと言ったのを新聞が報道したので、翌年は6人と言う状況。2年それが続いて、教委が募集停止を中学校に通達。

横澤：盛岡第二の応援歌練習は1年生の60数名の男子を真ん中にして、上級生の女子がとりまいて、やっていた。気合いを掛けられた。3年生の意識は高女時代同様、意気高くだった。2年生は、少し弱まっていた。フォークダンスの練習は覚えている。

千葉：僕のころは、男子は少なかったが応援団のリーダーは男子がやっていた。今でも、バスケットのOB会をやっている。

横澤：みんな、口では言わないけど、藤村さんの意見に賛成の人はいる。今さら何を言っても仕方がないと口では言っているけど。

* 横澤さんは東北大学理学部を卒業して、理科の教師になった。最初、仙台育英高校の先生、その後、岩手県の県立高校教員。

秋田県調査報告

1) 秋田県立増田高等学校訪問から

2011年8月18日 午前10時～11時20分

小玉事務長が応対。

『軌跡 増田高校 80 年史』を拝借できることになった。後日複写して返送。

その場で、ざっと、見たことでわかったことと、小玉さんから聞いてわかったこと。

- ・旧教育制度の中等学校最後の年度となった昭和21年4月に、町立秋田県増田高等女学校と秋田県増田女子農業学校が廃校となり、秋田県立雄平農蚕学校が開設された。男子部農業科・蚕業科と女子部2学級の4学級編成で五年制の学校。1年生に男子が99名入学し、女子も103名入学している。2年、3年、4年生は女子のみ。この段階で、男子部、女子部という男女併学を実施。

- ・1948年4月1日～秋田県立増田高等学校と改称。農業科、家庭科、普通科が設置されたが、農業科は男子のみ、家庭科は女子のみ、普通科は男女半々の男女共学制、総合制。農業科、家庭科の別学は明示的ではなく、実質的別学で、後にどちらにも女子が入ってくるようになり共学化した。徐々に、普通科だけではなく他の科の男女数も同数に近くなっていった。

- ・寄宿舎は男子のも新たに作り（最初は高女時代の作法室を利用）この周辺地域の子どもたちのさまざまな学習要求に応える学校作りが目指された。そういう意味では、アメリカ軍が掲げた高校3原則（地域制、総合制、男女共学制）が、矛盾無く適用できる地域だったことになる。

学校史によれば、増田に行けば、なんでも学べる、間に合うというような学校であることが、地域住民の要求だったのである。男女共学も県下での最初

の年度に行われている。

片野忠吉校長は昭和 19 年から 24 年まで在任しており、普通科のある、男女共学制、総合制の新制高校設立に奔走したという（詳しくは校史参照）。

- ・ 校歌は当時の片野校長が、平和な新生日本にふさわしい内容の作詞をしたということで、一番に平和、二番に自由、三番に真理、4 番に正義が入っている。戦後の日本国憲法、教育基本法体制を象徴するもの。

当時の教育課程と卒業後の進路等については、校史参照。

収集関連資料：

『平成 23 年度 学校要覧』秋田県立増田高等学校

『平成 24 年度 学校案内 総合学科、農業学科』秋田県立増田高等学校を収集。

校内諸施設を案内される。

2) 秋田県立横手城南高等学校訪問から
2011 年 8 月 18 日 午後 1 時 20 分 ~ 2 時 40 分

大澤校長先生へのヒヤリング

大澤：男女共学以前に大きな生活指導上の問題が発生（数年間）したが、共学になってからはそのようなことは起きていない。女子校時代には、下校時などにどこからか現れて、待ち伏せしている若い男がいたりしたが、そのようなことがなくなった。秋田県教育委員会が策定した第五次秋田県高等学校総合整備計画（平成 12 年 7 月）で、県内に残っていた県立女子校 7 校の共学移行は決まっていたから、実施が数年遅れたとしても、

全部の学校で共学化するだろう。

既に共学化したのは、由利高校（平成 17 年度）、秋田北高校、横手城南高校（共に平成 20 年度から）、翔北高校（平成 23 年度～、湯沢北高校、湯沢高校、湯沢商工高校の統合）の 4 校である。

橋本：共学移行の直接的な理由はどういうことですか。

大澤：生徒数の減少で、1 校で学校を維持することが困難になり、何校かの統合の必要性がでてきたこと、さらに、女子校の場合は学力低下が大きな問題となった。

私は、秋田北高が共学化するころに同校に勤務していたが、当時高校 3 年生の担任だった。秋田高校だけではなく、戦後設立された共学の秋田南高校の生徒より、学力が下がってきていて、コンプレックスを持っていた。たまたま、センター入試の会場が北高だけ、別の場所になって、私は憤慨したが、彼女たちは自分たちだけだと安心して、力を発揮できるという感じで、かえって良かったということがあった。横手城南高校もそれと同じような状況に、北高よりかなり前からなっていて、共学は学力低下に歯止めをかけることが、一つの重要な目的だった。

橋本：この地域だと、戦後門戸開放型の男女共学をしていた横手高校に、大学進学をめざす女子の多くが進学するようになり、戦前の横手中学、横手高等女学校以来の伝統をもつ両校であったが、横手城南高校の方の位置づけや、入学してくる生徒の傾向に変化が生じてきたということですね。現在の横手城南高校の男女比率はど

のぐらいですか。

大澤：(学校要覧を見ながら) 433 : 153 ぐらいですね(男子は約3分の1)。1年生は均等に5クラスに分けて共学をしています。1クラス10~11人が男子です。2~3年生は、ホームルームは相変わらず、男子が各クラス10人前後いますが、実際の授業は文系、理系にわかれてすることが多いので、男女比はばらばらです。

橋本：どんな男子が入学してきているのですか。

大澤：まじめで部活に励むような生徒が多いですね。本校には男子バスケ、弓道、剣道、野球部などがあります。部活を一生懸命にやりたいという希望をもつ生徒が多いので、共学になると、中学校などに野球部は作るから来てくれと、宣伝して歩きました。学校の裏に今は使っていない市営球場があるので、最初からそれを使わせてもらおうと交渉し、使わせてもらっています。

橋本：共学化して変わったこととして、どんなことがあげられますか。

大澤：第一に、男子の入学で、生徒が勉学に熱心に取り組むようになり、学力低下にストップがかかったことです。秋田北高も今は、3割が男子で学力低下は止まりましたが、施設(運動場や体育館など?)が不十分で、男子のできる部活はそれほど多くないですね。

本校の学力レベルは、角館高校や由利高校と同じぐらいで、3校合同補習などを行っています。

第二に、その結果、共学になってから初めての卒業生が出た平成23年3月の進学先に理工系の国公立大学

も出てきたことです。前年の国公立大学進学者は9名でしたが、今年の3月には20名になり、しかも理工系大学にも進学する生徒がでてきたことは、大きな変化です。

女子だけだと学力があっても、4年制の大学より、地元の3年制の医療専門学校に推薦で入学したりするのです。授業料が1年少なくて済むし、地元に住られてお金もかからない。就職も確実にできるからです。

経済不況もあって、進学も就職も地元志向が強まっています。

このあと、横手の隣の市である湯沢地区に、平成23年度から翔北高校(湯沢北高校、湯沢高校、湯沢商工高校の統合)が誕生したという話が出て、この学校のように、過疎化、少子化による学級減で統廃合となり、結果的に総合制と共学制への移行にもなるというような学校があと3校残っていることが確認された。

能代北高校(女子校)と能代商業高校(共学校)の統合

大館桂高校(女子校)と大館高校(共学校)、大館工業高校(共学校)の統合

角館高校(共学校)と角館南高校(女子校)の統合

女子校のみの共学化は秋田北、横手城南、(由利)であるが、統廃合ではなく、学力低下を阻止するための共学であった。秋田県の女子校7校の共学化移行の直接的な理由は、上記のように、「統廃合による学校の維持」と「学力低下の阻止」の2大理由に由来する。今回訪問の横手城南高校の場合は後者の理由によるものであったことが、明らかにされた。

おわりに

以上のように、宮城県では石巻商業高校のように、最近、男子高校から共学へ移行した学校で比較的男女比でも、教育内容でも男女共学の実が上がっている学校もあれば、仙台二華中学高校のような共学行が始まったばかりで、今年の高校には、昨年の入学男子を下回る人数しか集まらなかったという場合もある。この学校は、共学移行の過渡期にいるのだ。この場合、中高一貫校だということが、効いてくるのは、併設の中学校からの卒業生が高校へ進学するときである。この時点を注目したい。

岩手県では、戦後共学期を経過後、実質女子校に戻った盛岡第二高校の同窓会長を訪ねた。戦後共学期に学んだ男子生徒は後輩が女子生徒ばかりという経験をしている。昨年、夏に訪問した戦後共学期を経過した後、2002年まで男子校に戻っていた山口県立豊浦高校の場合、共学期の女子生徒たちは、一時、同窓会名簿からも排除されていたと言う。これの男子版とも言えるケースだが、女子のように同窓会から排除されたことはない。しかし、卒業後、男子系の盛岡第一ではなく、女子校系の盛岡第二出身だということで被った、有形、無形の不利益が職業選択その他にも影響を与えているようだった。この点では、女子が、男子系の高校を卒業したときとは反対の社会的作用が働いて居るようだ。ここには、社会の底流に潜むジェンダー秩序が関係しているように思える。

また、秋田県では、県立増田高校のように、アメリカ占領軍のもたらした高校3原則が適合するような地域が日本にもあったということや、女子校の共学移行の理由には女子の学力低下という現実があったこと、

男子系高校の共学化は進学希望の女子を吸収し、結果として女子校の学力低下を招いたことなどが、明らかにされた。2000年代以降の男女共学、別学問題は、当初持っていた女子のみの集団からなる人格形成と男女両方の集団からなる人格形成というような問題関心とは異なる次元の問題、生徒の進路、学力と家庭の経済的、文化的背景の違いにまで発展しかねない問題をはらむことになっていたのである。

今回の調査からも、上のような多くの新しい知見が得られた。詳しい分析は今後の課題としたい。